

## Clinical Case #3



### ピンときた側方運動

義歯の不安定と鉤歯の疼痛を主訴として来院  
口腔内での義歯の調整には限界があると判断。

上下義歯を口腔内に装着して印象\*  
咬合器にマウントした。(写真)

\* 製作された義歯の口腔内装着状態を模型にすることは簡単である。クラスプ・義歯の内面にアルギン印象材を塗り、口腔内に義歯を装着し、咬合させて義歯を顎提にフィットさせる。必ず、咬合させて義歯が顎提から浮き上がらないようにして、そのまま印象を採得する。義歯と石膏の間にアルギンを介在させることにより、義歯を石膏模型から着脱しやすくなる。



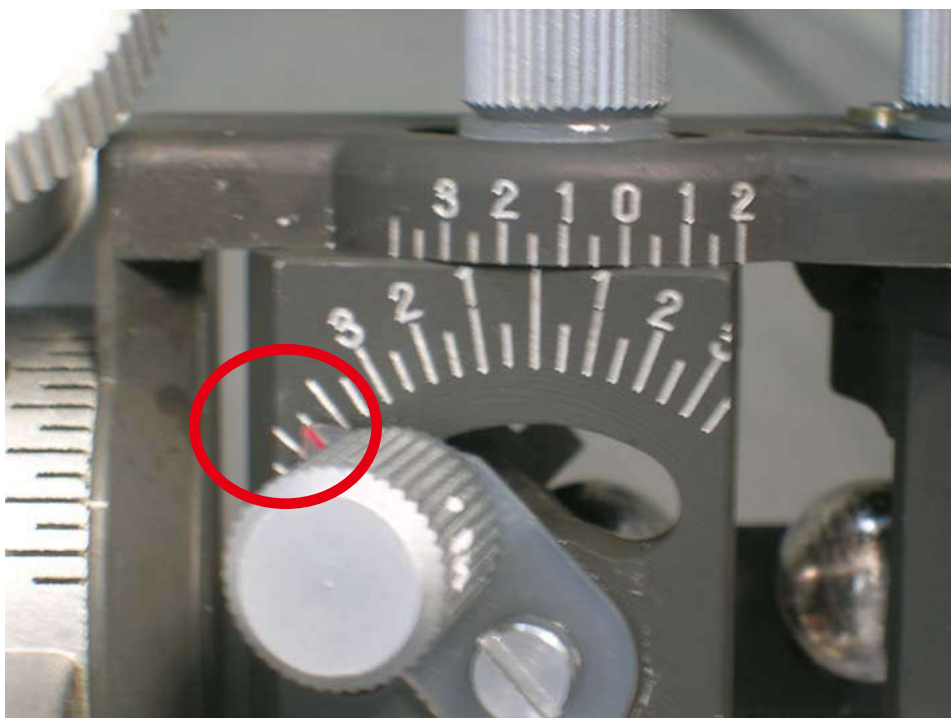
口腔内では、左側方運動には左上2は離開している。



咬合器上では、左上1～3が左側側方運動を誘導する。

このことは

生体では、作業側顆頭の後方に運動を意味する！



ならば、左側顎頭を後方に運動させてみよう (-35° )



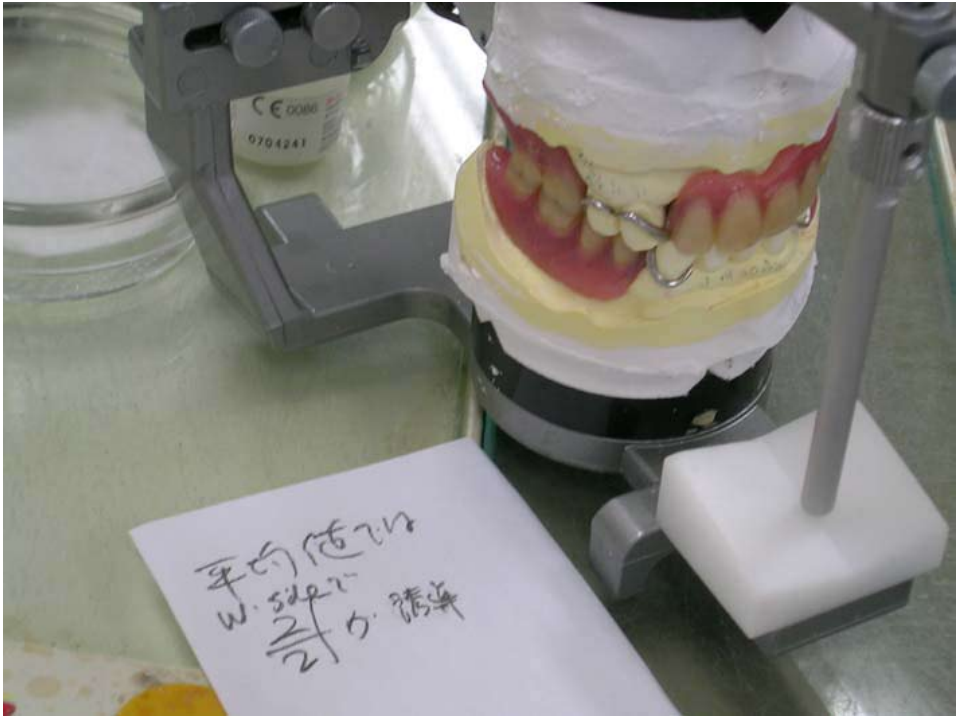
すると、咬合器上でも 生体と同様の  
側方運動状態となった。



無歯顎の場合は犬歯誘導は義歯の転覆を生じやすい



咬合器上で左上3～5の作業時の調和を図った。  
生体も同様の側方運動状態となり、安定を得た。



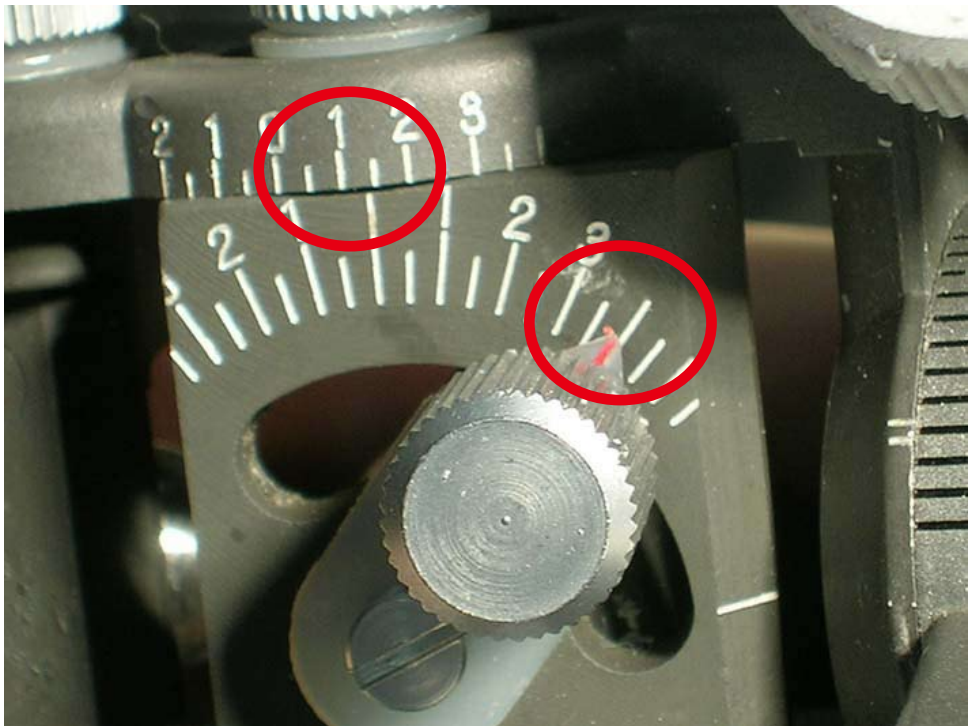
咬合器上では 右上2が右側方運動を誘導している。



拡大図である。



生体では 2は離開して5 4が強く当たっており、  
臼歯部は離開せず。（右顎頭は後方・上方に運動）



右顎頭を後方 35°、上方 15° に設定。



生体と同様に 2は離開して5 4 が当たり、  
臼歯部も咬合するようになった。



鉤歯 5 4 の疼痛はこの部位の過重咬合にあった。



咬合器での考察をもとに54の作業時の  
咬合接触を軽減した。



鉤歯 54だけでなく大臼歯部にも咬合を負担させた。



義歯の動揺を伴った鉤歯の疼痛は  
原因が複合しているために  
口腔内だけでの調整は困難である。

側方運動時の咬合紙によるチェックも  
視野の制限、唾液による不鮮明  
それに加えて、義歯そのものが動揺するため  
咬合紙によるチェックそのものが  
信頼できない。

このような場合には  
労をいとわず  
咬合器に模型を装着することだ。

パントグラフを使用しなくても  
咬合器上での  
模型の運動と生体での歯列の運動との  
比較により  
作業側顆頭の運動方向が推察できる。

この BGN 咬合器は  
顆頭運動を任意の方向に誘導できる。

是非、一家に一台は欲しい咬合器である。